

R・L・シロニス著

『エリウゲナの思想と中世の新プラトン主義』

創文社, 1992年, 390頁.

熊田 陽一郎

中世思想の源泉として、キリスト教の信仰と並んでギリシャ思想、ことに新プラトン派の思想が大きな影響を及ぼしている。本書は中世初期に活動したヨハネス・スコトゥス・エリウゲナを中心に据えて、その両思想の関わりを考察したものである。

第1部はギリシャ教父思想に当てられる。第1・2章においてニュッサのグレゴリウス、第3・4章において偽ディオニシオスがエリウゲナとの関係を視野にいれて考察される。第2部は「エリウゲナにおける神と人間」というタイトルで、エリウゲナの肯定・否定神学・人間論・認識論・学問論について、キリスト教と新プラトン主義の両思想が考察される。第3部にはそれ以後の思想史的考察がまとめられ、10・11章は中世思想、12・13章は現代思想における信仰と理性の問題が扱われる。これらはいずれも著者が約20年にわたって発表してきた論文を集めたもので、スペイン語とラテン語で書かれたものを、熊谷賢二氏その他の諸氏が邦訳したものである。この書はこうした著者と訳者の長い努力の積み重ねによるものであり、その結果として豊富な資料に裏打ちされた研究書が出来上がった。これに依って我々は教父思想とキリスト教神学のなかに、どれほど新プラトン派の思想が浸透しその思想形成を助けたかということを知ることが出来る。

エリウゲナを中心に据えた視点は正当であろう。エリウゲナの思想が中世思想全般に与えた大きな影響については最近の研究が明らかにしている。そしてその源流であるディオニシオスの思想が、元々不分明な出自であるにも拘らず中世のキリスト教思想に大きな影響を及ぼし、又数多くの注釈や翻訳が現れたのも、エリウゲナの媒介に依る所が大きい。この両者に共通のテーマといえは、肯定神学と否定神学の弁証法的関連ということであろう。我々は神の原因性を通して被造物から神のを知り得ると共に、神はそれらの全ての肯定的表現を越えた彼方にある超越者であり、否定的にしか表現できない。このパラドックスをディオニシオスはその著書の各所で語ってお

り、これを受けてエリウゲナは、この両神学のはらむ緊張関係をそのまま西欧中世の思想界に導入したのである。「神現」(theophania) という彼の独特の概念もこの緊張の中で理解されるべきであろう。このパラドックスを解明しようとする著者の苦心に敬意を払いながら、そこにまだ我々に理解できない所、不審に思はれる所を抜き書きしておきたい。

先ず第3章でディオニシオスとエリウゲナの両者について、新プラトン派的な「善の発出」という概念が考察される。ここに一つの基本的問題が潜んでいる。即ちキリスト教の創造という工作者的言語からの概念を、発出ないし拡散といった自然学的な概念に依って説明しようとする場合にどの様なずれが生じてくるかという問題である。ここで著者はこの問題については特に論じてはいない。ただ発出を愛(eros)の概念と結び付けてパーソナルな意味に理解しようとする。即ち流出とは必然的過程ではなく神の愛によるへりくだりであるとして、この要素はキリスト教的なものであり、非キリスト教的な新プラトン派思想にはみられないとしている。しかしすでに H. Koch が指摘しているように、神の愛(エロス)の下降が存在を上から下につなぐ連鎖であることはプロクロスにおいて明確に現れた考えである。たとえ両者のエロス概念に差異はあるにしても、もしここでディオニシオスのエロスの概念について語るならばより細かな考察が必要であろう。それでなくともディオニシオスについては、キリスト教のアガペ概念をエロス概念に置換えた元兇であるというニーグレンの厳しい批判もあることだし、ここから簡単に神のパーソナル性と愛の契機とを引き出して、新プラトン派との相違を論じることは問題であろう。

更にこの両思想の関係については63頁以下にまとめて考察されているが、ここにも幾つかの問題がある。著者はここで彼らの思想が、「キリスト教思想のギリシャ化なのか、ギリシャ思想のキリスト教化なのか?」という問いを立てて、「ギリシャの新プラトン派的思想のキリスト教化である」と結論するのだが、その論旨はやや曖昧である。

「たとえば偽ディオニシオスとエリウゲナが創造を説明するために善の流出や発出という新プラトン派的概念を使うとき、彼らがこれらの概念を非キリスト教的な新プラトン主義の意味とは異なる新しい意味で……たとえその意味が全く異なるものではないにしても……使っているということである。」

今述べたようにこの相違はそれほど明らかにはされていないのだが、次にその根拠づけとして、

「この事は、哲学上の用語と概念が（従って新プラトン主義のそれらをも含めて）象徴的で類比的なものであり、それ故様々のニュアンスや同義的でも無関係で全く違うのでもない意味を現しうるといふことに注目すると、不思議ではない。」と述べているが、著者は哲学的概念の全てについてこの様に考えているのだろうか？ 又神学的用語の方は象徴的でも類比的でもないのだろうか？ しかもこの哲学的用語の象徴性・類比性という特性を理由にして結論が引き出される。「したがって偽ディオニシオスとエリウゲナは新プラトン主義的な表現と概念をキリスト教の意味で使っており、そのためにこのことはキリスト教のギリシャ化であるよりもむしろギリシャの新プラトン主義思想のキリスト教化であるというべきであろう」。

この様な推論はどう見ても人を納得させるものではなく、疑念を残してしまう。要するにこのように大きな射程をもつ問題は性急に結論を出さず、もっと全体の流れを見渡した上で慎重に結論すべきであり、そうでないと大抵の場合水掛論に終わる危険がある。もちろんこの両思想の関係については、これまでの研究者にも多かれ少なかれ偏向が見られたことは事実であり、著者はむしろ逆の立場の偏向を意識してこれを是正しようとしているのだということは理解できる。例えばエリウゲナについて先行の学者達の一面的理解を正して、「できるだけ相反する要素の和合の道」を求めたカッポインスに依拠すると述べている。もちろんここでも余りにカッポインスに乗りすぎているという批判もできる可能性はあるが、ここは著者の選択の問題であろう。

次に 158 頁以下にエリウゲナのパラドックスについての説明がまとめられているが、「神は万物をはるかに超越しており、同時に神は自らの内に万物を包摂する。……これら二つの要素は、唯一のキリスト教的伝統の中ではなんの無理もなく調和させられるのである。キリスト教が信じる神はパラドックスの神である。超越的であり内在的である、隠れており同時に現れている。創造において、そして受肉において、被造物に自らを与え啓示する無限の悟りがたき神だからである」。パラドックスがキリスト教的神概念の特色であることについては、すでに 56 頁にも強調されている。しかしこの「唯一のキリスト教的伝統」とはなにか？ その中にパラドックスが「なんの無理もなく調和されている」のか？ この辺りはすでにかなり問題だと思うが、更に

「エリウゲナはキリスト教の教父の作品から新プラトン主義の表現や概念を受け取っているが、これは非キリスト教哲学から発生したもので、あるものがキリスト教的思考を表現するに必要なだけの正確性を持ち合わせていなかったのは当然のことである。

そしてエリウゲナの分かりにくく漠然としたところは、その新プラトン主義的要素からきているのである」。

この様に一方的に不明瞭な所をすべて新プラトン派に負わせて、それによってエリウゲナの正統性とキリスト教の価値とを結論するという論法にはやはり無理がある。起源的にいえば、このパラドックスはむしろ新プラトン派において明らかに語られていたものであり、それだからこそこれらのキリスト教神学者は新プラトン派の思想を採用したのではなかったか。

更に新プラトン派に関わることで今一つ問題だと思うのは、著者が新プラトン派というものを一つの固定概念として扱っていて、その長い歴史を殆ど考慮していない様に見えることである。周知の通り新プラトン派は、プロチノスから始まりプロクロスにいたる二百年余りの歴史をもち、その思想の流れも多岐にわたっている。基本的な発想は変わらないにしても、その問題意識、関心の持ち方はそれぞれ異なっているし、概念は多様化し複雑化している。ことに宗教との関係においては、後期の新プラトン派はプロチノスとはかなり異なっている筈である。従って同じく宗教から発生したキリスト教思想と比べる場合、新プラトン派内部のより肌目の細かい理解がどうしても必要になるのではないか？ これについてはまだ本格的な研究が日本では数少ないだけに、豊富な資料を持つ著者に期待しておきたい。

以上些か「ないものねだり」的な批評を書かせて頂いたが、そのような問題はあるにしてもこの著作は著者の長い努力の結実であり、ここに盛られた豊富な資料は、我々日本で学ぶものにとって大きな意味を持つことには疑いのないことである。又付録として収められている、西田幾太郎における中世思想の引用の集成なども、日本の生んだこの独自の思想家の源泉を知るために、新しい視点を提供するものとして興味深く読むことが出来た。
